

JAAP 瀬尾 央の NX2 画像補正出張講座

飛行機写真愛好家の数は近年飛躍的に増えているように思う。その8割以上がデジタル世代なのではなかろうか。では、そのデジタルの特性や長所を生かした作画活動を行っている人は、どの程度の割合になるのだろうか。

大半の愛好家の主たる目的は、珍しい機体を撮る、初物を撮る、ということに集中しているように見受けられる。特別塗装機しかり、新マークしかり。それはそれで決して悪いことではない。写真には目的があり、それが雑誌の投稿写真ならば編集部は小躍りするだろう。その目的にはかなっている。しかし、それがいい写真かどうかは、直接的な関係性は薄いのではあるまいか。いい飛行機写真とは、飛行機写真というジャンルを超えた一般性を持つことだと思う。飛行機に関心があるうがなかるうが、すなわちクラス優勝ではなく、総合優勝。誰もがまずは写真として一目を置くものではなかろうか。

飛行機写真の特性と画像補正の必要性

まずは飛行機写真の特性ということを考えてみよう。飛行機の撮影現場は、一般的に飛行場外柵での撮影となり、被写体までの距離があり、必然超望遠レンズに頼ることになる。すると、引きつけるものは機影のみならず、対象との間の空気の汚れや湿り気をも圧縮する。その結果、望む色やコントラストから遠ざかってしまう。そもそも白が白、黒が黒とは写ってくれない。それを少し神経を使って修正すると、画像は見違えるほど生気を発揮する。

モヤがかった空で機体を撮ったとする。少しでもキリリとした画像にするためにコントラストを高めたいが、単純にそうすると機体の下部などシャドー部分が黒く潰れてしまう。シャドー部分については明るく持ち上げ、バランスのとれた陰影を得たくはないか。そのためにはどうしたらいいのか。そもそもコントラストの操作は、画像補正ツールのコントラスト調整スライダーを動かす以外にも多様な方法がある。それぞれの特性を知り、はまりやすい落とし穴を回避し、適切な手段を選択することが肝要だ。

また、飛行機には衆知の色というものがある。エアラインの塗装、戦闘機の迷彩。しかしそれは、空の状況に応じて黄赤に傾斜したり、青が被ったりする。モヤによって色を失っていることもある。できることなら、共通認識ができる衆知の色に近づけたい。

そもそも、露出をカメラまかせにはしてはいまいか。最近のカメラの自動露出は極めて優れてはいるが、100%望んだ結果をもたらすわけでもない。明るすぎたり暗かったり、結構撮影者の意図から離れた結果を出す場合がある。デジタルならば液晶パネルで確認できるが、とっさに撮ったときや、夢中になって連写したような時は、露出ミスを見とるうなだれる。まずは同じシーンの再来はない。となれば、直せるものは直したいではないか。

また、飛行機の撮影に多用する超望遠レンズやズームレンズは、

掲載の作例は、軍用機・民間機を撮影したものを基本的に光の日変化の順で配列した。各左列が元画像、右列がNX2を使用した画像補正後の作例である。



たとえそれが100万円クラスのものであっても、周辺光量不足という問題が多い。通常の空は、超望遠レンズで画角5°といった狭い範囲を切り取った際、明度彩度ともに均一であってほしいが、そのように写るだろうか。ほぼすべてのレンズが、浅い絞りの時、あるいは元画像のコントラストを高めた時、具体的には抜けるような青空や、増感してやっと撮ったような曇り空の場合であるが、四隅が暗くなる。それを放置していいだろうか。気に入った画ならば、あるべき姿に引き寄せたい。

フォーカスが殊の外しっかりしているが、想定外の電線や地べたの杭などが写り込むことがある。深くその画を捨てるのもひとつの方法、それを消して救うのもひとつの方法。雑誌の投稿等では許されない場合があるにせよ、ブログや個展など、自分が責任を持てる自分の作品といえる場ならば、堂々と補正すればよい。

そもそも撮影は晴れの日ばかりではない。順光に位置できる場所ばかりでもない。晴れや順光を墨守すると、撮影機会は確実に減る。撮影機会が減ることは、明らかにいい写真との遭遇率をも減少させる。リスクをふみ、常識に反し、他人のやらないことを試みるのがあっていい。撮影機会の分母が大きければ、たとえあらかた失敗しても、いつか逆手にとった成功例に遭遇できる。

もしそこで画像補正の助けを借りることが可能ならば、逆手にとった成功例との遭遇率は飛躍的に拡大する。このことは自分自身の写真領域の拡大につながっていくはずである。

例えば見事な夕焼けを背景とする機体を撮ったとする。単純に夕焼けを強調すると、機体は黒く潰れがちだ。機影を明るくし、明るくした部分のコントラストを若干強めたいが、そうすれば夕焼けも明るくなって見せたい色を失ってしまう。空は濃く、機体は明るくという相反する画像補正が必要になる。それは、具体的にはどうすればいいのか。ともかくケースバイケースで自在に画像を扱うことができれば、作品性を高めることが出来る。

シャッターを押した瞬間、この画像はこうあって然るべき、と思うことはないだろうか。撮影後カメラの液晶パネルで見るのはブレやフォーカスだけだろうか。然るべき画像か否か、望む画と実画像の差を併せて確認し、それが画像補正の範囲内にあるかどうか直感的に分かるようになると、撮影の守備範囲は明らかに広がる。それはきっと、新たな面白さを生むだろう。

また画像補正は、その技量に応じた極めてアナログ的な行為であるがゆえに、常にベターしがなく、ベストといえる結果は存在しない。じつは撮影に要した日数と同等の時間を、選んだ十数コマの事後の補正作業に費やし、今まで何万コマの処理をしたか定かではないが、今でも常に自分自身の進化を感じることができる。例えば昔の写真を取り出し、何年かぶりに再処理してみる。すると格段に大胆なことが可能となり、結果は向上しており、そこに至る工数も半減するのである。当然ノイズも少なくなる。言い換えれば、以前はゴミ箱行きだった写真を大幅に救えることにもなるのだ。それにより写真的財産を増やすことになる。

改めていうが、「する・しない」と「できる・できない」は次元が異なる事柄だ。まずは「できる」域に技術を高めておき、「する・しない」を判断することが理想なのではあるまいか。

出張講習

撮影現場で、あるいはJAAP講習会や撮影会で多くの飛行機写真愛好家にお会いする。画像補正の使用前・使用後の作例をお見せすると、一様に驚かれる。その必要性を感じ、現像ソフトの取説や教本なども読まれてはいるが、しかし実操作となると関心事



に集中しがちで、体系的な操作ができていない。そもそも数十人で行う講習会で、それを伝えることには無理がある。使用カメラのメーカーも異なり、経験も技量も異なる。究極的に望むところも、それぞれの撮影者で千差万別だ。

画像補正の徹底した講習を行うには、個人もしくは数人を対象として、対象者の経験や技量に応じて、まずは手取足取り、すべきことを系統的に順を追って実演することがよいと常々感じている。その方が、マニュアルと首っぴきの独習でトライ&エラーを重ねるより理解が早く、成果もすぐに得られるはずだ。

そして、個人もしくは数人の講習であれば、こちらが訪問する出張講習がいいのではないかと思いついたのである。

講習の概略と費用

基本的には、0900時から1700時まで、数度の休憩を挟みながら8時間程度やってみれば、見違えるようになるはずだ。1日目は午後、2日目は午前で、合わせて8時間でもよい。その会場や道具は、受講者が日常使っているもので行うが、必要あればノートPCと24inch液晶ディスプレイを持参してもよい。そして、そのクラスのディスプレイを参加者全員が見るには、最大人数で4人だろう。可能なら、参加者全員が個人のノートPCを使用できることが望ましい。

受講料は1回1名の場合50,000円、1名増えるごとにプラス10,000円で、最大4名まで。会場は受講者ご希望の場所とし、少人数のお仲間が集まってもらいたい。出張コストについては最も安価な方法を受講者と相談して選ぶことにするので、受講者が負担してほしい。

また、当方が訪問するまでに事前に「宿題」も出し合いたい。受講者が補正に悩んだ1コマを、それは原則としてNikon RAWであるが、事前にデータ転送サービス等を利用して送ってほしい。こちらからも、このコマを補正してみて、というものを受講生の人数分お送りする。事前の画像との格闘があれば、より理解が深まるだろう。

ただし今回は、その使用ソフトについては、当面の講師である瀬尾の慣れ親しんだNikon NX2に限定したい。PhotoshopについてはJAAPの今原会員が得意とするところだし、DPPやSilkypixについては、また別の会員が担える日が来るだろう。

将来プロジェクトにかかわる新人作家発掘

じつは、出張講習にはもうひとつの狙いがある。これは人捜しの旅でもあるのだ。飛行機写真における予想だにしない着眼点をもつ人に出逢いたい。決して画的完成度ではなく、発想や着眼点に対する注目である。数十人規模の講習会を行うと、あるいは写真展公募作品を見せてもらおうと、正直言ってそのうちの何人かには「お見それしました」と脱帽感に襲われることがある。あからさまに言えば、「負けた」と思うのだ。

そうした写真をミニマム30点、持つ人を探したい。写真展公募ならば1点だが、画像補正すれば使える30コマを持つ人である。そのことに遭遇できる機会は、多人数の講習会ではツメが甘く望むようにはいかない。こちらから出掛け機会を探す方法が現実的だろう。これはまだ発表できないが、私がある時までJAAPの会長であれば、ぜひとも実現したい将来プロジェクトに直結する手がかりなのである。ぜひ、シリアスに検討してほしい。

お問い合わせ・募集要項等は、airworks@mua.biglobe.ne.jpにご連絡下さい。
(JAAP会長：瀬尾 央)

